

友人を開示者としたオープナー・スキル尺度 （大学生版）の開発

堀内 孝・山崎(旧姓 宮田) 直子・池田(旧姓 中島)恵子

青年期は人生において友人関係の重要性が最も高くなる時期である。友人関係の形成や維持には、友人との対話が不可欠であるが、自分に関する情報を他者に言語的に伝える行為は、自己開示 (self-disclosure) と呼ばれている。自己開示は、人間が社会生活を営む上で不可欠な社会的行動のひとつであり、Jourard (1964; 1971) によって体系的な研究が始められて以来、多くの研究が行われてきた。自己開示は、人間関係の親密化 (Altman & Taylor, 1973) を促進する機能やトラウマのような強いストレスを低減する機能 (Pennebaker, 1989) があり、自己開示を行うことができる友人の有無が、個人の適応に大きな影響をあたえることが知られている。

自己開示が成立するためには開示する者がいると同時に、その話を聞く被開示者もいる。被開示者のうち、親密な自己開示を受けやすい人をオープナー (opener) という (Miller, Berg, & Archer, 1983)。Miller et al. (1983) は、自己開示の受けやすさの個人差を測定するため、1因子10項目からなるオープナー尺度を開発し、一連の研究を行っている。我が国では、小口(1989)が翻訳版を作成しており、尺度が「なごませ」因子と「共感」因子からなる2因子構造であることを明らかにしている。「なごませ」は相手の話を積極的に聞き出す因子であるのに対し、「共感」は相手の話を受容することに関係する因子と考えられる。

ところで、近年の被自己開示研究では、オープナーが有するスキルや行動特徴の重要性が指摘されている。たとえば、伊藤・鈴木(2006)は、話し手が聞き手に対して、“うなずきを多くする”や“じっくり考えながら話す”といったスキルを求めることを明らかにしている。また、森脇・坂本・丹野(2002)は、聞き手の受容的反応として、“最後まで時間をかけて聞く”や“適切なアドバイスをする”などの行動を見出している。このような相手の自己開示を促進し、積極的に聞き出すスキルは、小口(1989)の見出した「なごませ」因子とも関係があると考えられる。

伊藤・鈴木(2006)や森脇他(2002)、小口(1989)といった先行研究の尺度は、開示者を特定しない一般的な項目群から構成されている。しかしながら、青年期の友人関係を研究するにあたって、友人関係の形成と維持に深く関与する被自己開示行動の在り方を正確に理解することは極めて重要であり、また、その被自己開示行動には親子関係や恋人関係とは異なる、友人関係に独自のスキルが存在する可能性が指摘される。そこで、本研究では、友人を開示者としたオープナー・スキルを「自己開示を受けやすい人が有している、友人からの自己開示を促進するス

キル」と定義し、大学生を対象に、当該構成概念を測定する尺度を作成することを目的とする。

研究 1

目的

友人を開示者としたオープナー・スキル尺度(大学生版)を作成し、その因子構造を確認するとともに信頼性を検討する。さらに、オープナー・スキルという構成概念から関連が予測される尺度との相関を検証する。

方法

尺度の候補項目の作成 心理学を専攻する大学生10名に対し「自己開示を受けやすい人とはどのような人だと思いますか」、「聞き上手とはどのような人だと思いますか」といった質問を中心とした半構造化面接を実施した。その結果、以下のような被自己開示プロセスが明らかになった。オープナーは、相手から相談を受けた場合、①自己開示の導入段階で自己開示しやすい雰囲気を作る。②自己開示が始まったら話に真剣に耳を傾け、開示者の話や表情等から心情を察する。③開示者の抱える悩みや問題の要点をまとめて整理する。④開示者の抱える問題についての知識を持ち合わせている場合には開示者にアドバイスを与えるなど一緒に解決策を考える。また、親密な自己開示を受ける対象の大半が友人であった。このような被自己開示プロセスを十分に考慮した上で、オープナーが有する被開示に関するスキルを具体的に記述する8項目を暫定的に作成した。また、小口(1989)の邦訳した尺度を参考にして、オープナー・スキルを具体的に記述する6項目を作成した。そして、第二著者を中心に、第一著者および心理学を専攻する大学生4名で項目内容についての協議を行い、開示者を明示するために“友人”を各項目の文章に入れることにした。各項目の文章に関して、繰り返し何度も推敲を重ね、最終的な尺度の候補項目(14項目)を完成した。

調査対象者 国立大学の学生309名を対象とした。回答者のうち、回答に不備のあるものと留学生を除いた270名(女性169名、男性101名)の日本人大学生を有効回答者とした。平均年齢は20.29歳($SD=1.24$)であった。

調査内容 質問冊子はオープナー・スキル尺度、関連性検討のための8尺度、および、プロフィール欄から構成されていた。いずれの尺度に関しても5件法(1.全くあてはまらない、2.あまりあてはまらない、3.どちらでもない、4.少しあてはまる、5.よくあてはまる)で回答を求めた。具体的な尺度内容は以下の通りである。

(1) 友人を開示者としたオープナー・スキル尺度(大学生版)：当該尺度作成のための候補項目14項目。

(2) パースペクティブ・テイキング：Davis(1983)が作成したパースペクティブ・テイキング尺度を使用した(訳はBuss(1989)の邦訳版(1991)による)。この尺度は、視点をかえて物事を別の角度から考えたり、他人の立場に立って物事を考える態度を測定する7項目から成る。他者の

視点取得は、オープナー・スキルを行使するために必要な能力であることから、中程度の正の相関が予測される。

(3) シャイネス：Cheek & Buss (1981) が作成したシャイネス尺度を使用した（訳はBuss (1989) の邦訳版 (1991) による）。この尺度は、対人場面における緊張、心配、不快、抑制といった感情を測定することを目的とした9項目から成る。シャイネスの高い人は対人的不適応を生じやすいと考えられると、オープナー・スキルとは弱い負の相関が予測される。

(4) 自尊感情：Rosenberg (1965) が作成した10項目を、山本・松井・山成 (1982) が邦訳した自尊感情尺度を使用した。オープナー・スキルの高い人は、自己開示を受けやすいことから、自分は人から必要とされる価値のある人間であるという自尊感情が高くなると考えられる。したがって、オープナー・スキルとは弱い正の相関が予測される。

(5) 社交性：Cheek & Buss (1981) が作成した社交性尺度を使用した（訳はBuss (1989) の邦訳版 (1991) による）。社交性の高い人は親和的な対人関係を好むため、自己開示を受ける機会も多いと考えられるので、オープナー・スキルとは弱い正の相関が予測される。

(6) 責任感：Harris (1957) が作成した5項目からなる責任感尺度を使用した（訳はBuss (1989) の邦訳版 (1991) による）。自己開示者は、話を真摯に聞いてくれる責任感のある人を選択して開示すると考えられるので、オープナー・スキルとは弱い正の相関が予測される。

(7) 内的他者意識：辻 (1993) の他者意識尺度の中の内的他者意識尺度を使用した。この尺度は他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感に察知し、理解しようとする意識や関心を測定する7項目から成る。他者の気持ちを敏感に察することはオープナー・スキルにとって極めて重要であることから、中程度の正の相関が予測される。

(8) 社会的スキル：社会的スキルを身につけている程度を測定する菊池 (1988) のKiSS-18を使用した。オープナー・スキルは、良好な人間関係を作るために必要なコミュニケーションスキルの一つであることから、社会的スキルとは中程度の正の相関が予測される。

(9) セルフ・モニタリング：Snyder (1974) が作成し、岩淵・田中・中里 (1982) が邦訳したセルフ・モニタリング尺度を使用した。この尺度は、自己のおかれた社会的状況の性質を察知し、自己の表出行動や自己呈示を統制する傾向を測定する25項目から成る。オープナー・スキルに長けた人は、開示者の話題に応じた臨機応変な行動をとることができると考えられる。よって、オープナー・スキルとは弱い正の相関が予測される。

(10) プロフィール：調査対象者の性別、年齢、学年、出身都道府県の記入を求めた。

手続き 大学の講義時間内に講義室において、回答依頼を口頭で述べた後、質問紙調査を集団で実施した。調査に先立ち、本研究の目的と意義を説明し、研究に参加するか否かは個人の自由であること、データの分析は匿名で行われ研究目的以外には使用しないことなどを伝えて同意を得た。質問紙はその場で回収した。

結果および考察

オープナー・スキル尺度の因子分析と信頼性 オープナー・スキル尺度の全14項目について正規性の確認をしたところ、1項目について分布に過度の偏りが認められたため、分析の対象外とした。残りの13項目について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、固有値の減衰率(3.80, 1.44, 1.20, 1.06, .96,)から、1因子が妥当であると判断した。因子負荷量が.40に満たなかった5項目を削除し、再度8項目で因子分析を行い、最終的な1因子構造を決定した(Table 1)。当該因子による分散説明率は36.3%であった。全項目の平均得

Table 1 オープナー・スキル尺度の因子構造(最尤法, $n=270$, $\alpha=.82$)

	負荷量	M (SD)
3.友人が打ち明け話をしやすい雰囲気をつくることできる	.81	3.41 (1.06)
2.周りの友人をくつろいだ気分にさせることできる	.72	3.45 (.95)
4.親身になって友人の話を聞く	.65	4.17 (.83)
7.友人が自分に意見を求めているのか、ただ聞いてほしいだけなのかを察することができる	.58	3.41 (1.04)
11.友人の悩みを聞き、一緒に解決策を考える	.51	3.97 (.92)
10.友人の悩みを聞いて、話を整理することできる	.49	3.78 (.95)
8.友人の話に適切な相づちが打てる	.49	3.91 (.88)
9.友人の話を聞いているとき、口には出さない気持ちまで察しようとする	.47	3.72 (.96)
	全体平均	3.73 (.63)

点を算出し、平均 \pm 1SDを基準とした高群と低群で、項目ごとにt検定を行った結果、8項目すべてにおいて1%水準の有意差が確認された。また、信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha=.82$ と十分な値が得られた。尺度項目毎の平均値と、全項目の平均値($M=3.73$, $SD=0.63$)を算出した。性差を検討したところ、いずれの平均においても有意差は認められなかった($p<.05$)。性差が認められなかったことから、本尺度は男女に共通して必要なスキルから構成されていると考えられる。

関連尺度との相関 各尺度について出典論文で示された因子構造をもとに尺度得点を算出した。内的整合性を確認するためにCronbachの α 係数を算出したところ、責任感尺度は.49と低い値であったので以下の分析から除外した。それ以外の尺度は.70~.89の範囲にあり、概ね内的整合性が確認された。オープナー・スキル尺度と、7つの関連尺度との相関係数を求めた結果(Table 2)、有意な正の相関がKiSS-18($r=.61$, $p<.01$)、内的他者意識尺度($r=.60$,

Table 2 オープナー・スキル尺度と各関連尺度の相関係数($n=270$)

パースペクティブ・テイキング($M=3.20$, $SD=0.61$, $\alpha=.70$)	.45**
シャイネス($M=3.50$, $SD=0.84$, $\alpha=.86$)	-.36**
自尊感情($M=2.93$, $SD=0.76$, $\alpha=.89$)	.28**
社交性($M=3.37$, $SD=0.82$, $\alpha=.78$)	.40**
内的他者意識($M=3.70$, $SD=0.77$, $\alpha=.89$)	.60**
iSS-18($M=3.04$, $SD=0.61$, $\alpha=.88$)	.61**
セルフ・モニタリング($M=3.22$, $SD=0.40$, $\alpha=.74$)	.46**

** $p<.01$

$p<.01$), セルフ・モニタリング尺度($r=.46, p<.01$), パースペクティブ・テイキング尺度($r=.45, p<.01$), 社交性尺度($r=.40, p<.01$), 自尊感情尺度($r=.28, p<.01$)との間に認められた。一方, シャイネス尺度とは有意な負の相関が認められた($r=-.36, p<.01$)。これらの相関は, いずれも予測に合致したものであった。自尊感情とは正の相関, シャイネスとは負の相関が得られたことから, オープナー・スキルの高い人は精神的健康度の高い人であることが示唆される。また, 社交性との正の相関からは, 人望のある人柄をうかがうことができる。

研究 2

目的

友人を開示者としたオープン・スキル尺度(大学生版)の時間的安定性に関する信頼性を再検査法によって検討する。

方法

調査対象者 二回の調査でともに不備の無い回答が得られた国立大学の日本人学生72名(女性51名, 男性21名)。一回目の調査における平均年齢は18.31歳($SD=.57$)であった。

調査内容および手続き 一回目の調査では, オープナー・スキル尺度8項目への回答と, 調査協力者の性別, 年齢, 学年, 出身都道府県, 携帯電話番号の下4桁の記入を求める質問冊子を講義時間の一部を使用して一斉配布し, その時間内に回収した。研究1と同様に5件法で回答を求めた。3週間後, 再度同じ講義で同じ質問紙を用いた二回目の調査を行った。同一協力者の一回目と二回目の回答を匿名で照合するために, 携帯電話番号の下4桁を参照した。なお, 調査に先立って, 研究1と同様に, 研究の目的や意義, 参加が任意であることなどを説明し, 同意を得た上で調査を実施した。

結果および考察

最尤法による因子分析の結果, 研究1同様の1因子構造が確認された。また, Cronbachの α 係数を算出したところ, 一回目の調査において $\alpha = .82$, 二回目の調査において $\alpha = .81$ であり, 十分な内的整合性が認められた。

オープン・スキル尺度の再検査法における信頼性を検討するために, 二回の調査における測定値間の相関係数を求めたところ, 再検査信頼係数は.85($p<.01$)であった。すなわち, 十分な時間的安定性が確認された。

研究 3

目的

友人を開示者としたオープン・スキルが「自己開示を受けやすい人が有している, 友人からの自己開示を促進するスキル」と定義されるのであれば, オープナー・スキル尺度は“友人か

ら自己開示を受ける程度(被開示される程度)”と正の相関を示す必要がある。自己開示には様々な側面があるが、最も基本的な次元は量と深さの二次元だと考えられる(榎本, 1997)。自己開示の量とは自己開示の頻度や時間によって表されるものであり、自己開示の深さは感情をこめられた程度によって表される。そこで、本研究では、被自己開示頻度(量)と被自己開示深刻度(深さ)をもとに被開示の程度を評価し、オープナー・スキルと中程度の正の相関を示すことを確認する。

また、オープナー・スキルは、良好な人間関係を作るために必要なコミュニケーションスキルの一つであり、社会的スキルの下位要素だと考えられる。研究1で得られたオープナー・スキルと社会的スキルの相関係数の大きさは中程度($r=.61$)であった。この結果は、オープナー・スキル尺度の基準関連妥当性(併存的妥当性)を支持する一方で、社会的スキルに対する弁別性を示す必要性を指摘するものである。また、被自己開示を促進する最大の要因は、被開示者自身の自己開示であることが知られている(榎本, 1997)。したがって、オープナー・スキルの高い人が自己開示を受けやすいのは、オープナー・スキルの高い人自身が自己開示をよくするという可能性が示唆される。そこで、階層的重回帰分析を使用することによって、社会的スキルや自ら行う自己開示に対する増分妥当性をオープナー・スキルが有するかどうかを検証する。

方 法

調査対象者 国立大学の学生624名を調査対象者とした。全回答者のうち、記入漏れなど回答に不備のあるものと留学生を除いた、573名(女性361名, 男性202名)の日本人大学生を有効回答者とした。平均年齢は19.70歳($SD=1.23$)であった。

調査内容 以下の項目からなる質問紙の回答を求めた。

- (1) 友人を開示者としたオープナー・スキル尺度(大学生版)：研究1で作成したオープナー・スキル尺度を使用した。
- (2) 社会的スキル：菊池(1988)によって作成されたKiSS-18を使用した。以上の2尺度は、いずれも5件法(1. 全くあてはまらない, 2. あまりあてはまらない, 3. どちらでもない, 4. 少しあてはまる, 5. よくあてはまる)で回答を求めた。
- (3) 被自己開示の程度：実際にオープナーが受けている自己開示の頻度(量)を調べるため、「あなたは普段の生活で友人から悩みを打ち明けられたり、相談を受ける機会がどの程度ありますか」という項目を設定し、4件法(1. ほとんどない, 2. たまにある, 3. ときどきある, 4. よくある)で回答を求めた。さらに、被自己開示の内容の深刻度(深さ)を調べるため、「あなたが普段の生活で友人から受ける悩みや相談はどの程度深刻なものですか」という項目を設定し、4件法(1. 全く深刻でない, 2. 少し深刻だ, 3. 深刻だ, 4. かなり深刻だ)で回答を求めた。
- (4) 自己開示の程度：実際にオープナーが行っている自己開示の頻度(量)を調べるため、「あなたは普段の生活で友人に悩みを打ち明けたり相談をしますか」という項目を設定し、4件法(1. ほとんどない, 2. たまにある, 3. ときどきある, 4. よくある)で回答を求めた。さらに、実

際にオープナーがどれだけ深刻な自己開示（深さ）を行っているのかを調べるため、「あなたが普段の生活で友人に打ち明ける悩みや相談はどの程度深刻なものですか」という項目を設定し、4件法（1. 全く深刻でない、2. 少し深刻だ、3. 深刻だ、4. かなり深刻だ）で回答を求めた。

（5）プロフィール：調査対象者の性別、年齢、学年、出身都道府県の記入を求めた。なお、上記以外に三つの尺度の調査も同時に行ったが、研究3の趣旨から外れるので報告は割愛する。

手続き 大学の講義時間内に講義室において、回答依頼を口頭で述べた後、質問紙の集団施行をした。なお、調査に先立って、研究1および2と同様に、研究の目的や意義、参加が任意であることなどを説明し、同意を得た上で調査を実施した。質問紙はその場で回収した。

結果および考察

オープナー・スキル尺度8項目で因子分析（最尤法）を行った結果、研究1、2と同様の1因子構造が確認された。Cronbachの α 係数も.80と十分な値であった。8項目の平均を調査対象者ごとに算出したものを、オープナー・スキル得点とした。KiSS-18は18項目の平均を尺度得点とした。KiSS-18の α 係数は.89と十分な値であった。被自己開示得点は、頻度得点と深刻さ得点の平均を求めることにより算出した。同様に、自己開示得点も頻度得点と深刻さ得点の平均で算出した。

相関係数 オープナー・スキルとKiSS-18、被自己開示、自己開示の関連を検討するため、ピアソンの積率相関係数を算出した（Table 3）。その結果、オープナー・スキルは、KiSS-18

Table 3 オープナー・スキルとKiSS-18、被自己開示、自己開示との相関係数 ($n=563$)

	<i>M (SD)</i>	オープナー・スキル	KiSS-18	被自己開示	自己開示
オープナー・スキル	3.75 (0.61)	—			
KiSS-18	3.12 (0.60)	.57**	—		
被自己開示	2.44 (0.72)	.52**	.43**	—	
自己開示	2.14 (0.80)	.28**	.16**	.48**	—

** $p<.01$

($r=.57, p<.01$)、被自己開示 ($r=.52, p<.01$)、自己開示 ($r=.28, p<.01$) との間にそれぞれ有意な正の相関係数を示した。オープナー・スキル尺度が、自己開示の受けやすさ（被自己開示得点）に対して中程度の正の相関を示すことは、構成概念からの予測に合致する結果である。

増分妥当性の検討 オープナー・スキル尺度の増分妥当性を検討するため、被自己開示得点を従属変数、KiSS-18と自己開示、オープナー・スキルを独立変数とする階層的重回帰分析を行った（Table 4）。独立変数の投入方法は、第1ステップでKiSS-18と自己開示を投入し、第2ステップでオープナー・スキルを投入した。その結果、決定係数の有意な増加がみられ ($\Delta R^2 = .06, p<.01$)、第2ステップにおいて自己開示 ($\beta = .36, p<.01$) とオープナー・スキル ($\beta = .30, p<.01$)、KiSS-18 ($\beta = .20, p<.01$) が有意であった。この結果は、オープナー・スキルは自己開示の受けやすさ（被自己開示得点）に対して、自ら行う自己開示に次ぐ影響力を有していることを示すものであり、また、KiSS-18と自己開示に対する増分妥当性を示す結果である。

Table 4 被自己開示を従属変数、オープナー・スキル、KiSS-18、自己開示を独立変数とする階層的重回帰分析 ($n=563$)

従属変数			標準偏回帰係数 (β)		R^2	ΔR^2
			Step1	Step2		
被自己開示	Step1	KiSS-18	.36**	.20**	.36**	.36**
		自己開示	.42**	.36**		
	Step2	オープナー・スキル		.30**	.41**	.06**

** $p < .01$

総合的考察

本研究では、友人を開示者としたオープナー・スキルを「自己開示を受けやすい人が有している、友人からの自己開示を促進するスキル」と定義し、大学生を対象とした尺度を作成することを目的とした。この目的を達成するために、研究1では、被自己開示プロセスを明らかにしたうえで候補項目を作成し、因子分析によって1因子8項目からなる尺度構造を決定した。信頼性は十分であり、また、関連尺度との相関は、予測に合致する値が得られた。研究2では、尺度が十分な再検査信頼性を有することが確認された。研究3では、被自己開示の程度に対して、オープナー・スキルが正の相関を示すこと、社会的スキルや自ら行う自己開示に対する増分妥当性を有すること、が確認された。以上の結果は、本研究で作成したオープナー・スキル尺度が、十分な信頼性と妥当性を有していることを示すものであり、大学生の友人を開示者とした被自己開示行動を詳細に検討するための有用な道具になり得ることを示唆している。

ところで、自己開示を促進させるスキルを考えるうえで注意せねばならないのは、たとえば、単純にただうなずくことが有効なスキルになるわけでない、ということである。同時発話の適切性は、会話の内容やタイミングに依存し、不適切な同時発話は逆に自己開示を抑制することになりかねない。また、被自己開示が行われる一連のプロセスの中で、開示者が話し始めた初期の段階と、話しが終わる最後の段階では必要とされるスキルは異なるであろう。すなわち、スキルは単なる行動ではなく、自己開示者の特性や状況、開示の目的、両者の関係性、会話の前後関係といった文脈の中で適切に使用して初めてその機能が有効になると考えられる。本研究のオープナー・スキル尺度は、大学生の友人からの被自己開示に特化している。また、被自己開示プロセスを勘案し、具体的なスキル行動を記述する項目を採用している。したがって、スキルの不足点を詳細に検討する際には、全体得点だけでなく、各項目の得点を精査することも有益な情報を提供すると考えられる。友人関係を構築するためのスキルトレーニングや臨床といった実践場面において、本尺度の効用と限界を踏まえつつ、有効に活用されることが期待される。

引用文献

- Altman, I., & Taylor, D.A. (1973). *Social penetration*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
 安藤清志 (1990). 「自己の姿の表出」の段階 中村陽吉 (編) 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会 pp.143-198.

- Buss, A. H. (1986). *Social behavior and personality*. Hillsdale, New Jersey: LEA.
(バス, A.H. 大淵憲一(監訳) (1991). 対人行動とパーソナリティ 北大路書房)
- Cheek, J. M., & Buss, A. H. (1981). Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 330-339.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- 榎本博明(1987). 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について. 心理学研究, 58, 91-97.
- 榎本博明(1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- Harris, D. B. (1957). A scale for measuring attitudes of social responsibility in children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 55, 322-326.
- 伊藤有里・鈴木伸一(2006). 自己開示を促進する聞き手のスキルに関する研究. 広島大学大学院心理臨床教育センター紀要, 5, 28-41.
- 岩淵千明・田中國夫・中里浩明(1982). セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究 53, 54-57.
- Jourard, S. M. (1964). *The Transparent Self*. New York: D.Van Nostrand.
- Jourard, S. M. (1971). *Self-Disclosure: An experimental analysis of the transparent self*. New York: Wiley-Interscience.
- 菊池章夫(1988). 思いやりを科学する 向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- 森脇愛子・坂本真士・丹野義彦(2002). 大学生における自己開示方法および被開示者の反応の尺度作成の試み 性格心理学研究 11, 12-23.
- Miller, L. C., Berg, J. H., & Archer, R. L. (1983). Openers: Individuals who elicit intimate self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 1234-1244.
- 小口孝司(1989). 自己開示の受け手に関する研究—オープン・スケール, R-JSDQとSMIを用いて— 応用社会学研究, 31, 49-64.
- Pennebaker, J. W., (1989). Confession, Inhibition and Disease, Berkowitz, L. (ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, 22, 211-244.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. NJ: Princeton: Princeton University Press.
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- 辻平治郎(1993). 自己意識と他者 北大路書房
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

1本論文は、第一著者が研究1から研究3を通して全てのデータの分析・再分析を行い、新たな解釈の下、一つの論文としてまとめたものである。研究1は第二著者(山崎直子)が2006年に、研究3は第三著者(池田恵子)が2008年に、それぞれ岡山大学文学部に提出した卒業論文からデータの提供を受けたものである。いずれの卒業論文も第一著者(堀内孝)が研究指導を行った。